

科目：国語

●問題冊子 5 ページ：（一）問四 最終行

（誤） 方法がないとうこと。

（正） 方法がないということ。

●問題冊子 6 ページ：（一）問六

選択肢の記述に不適切な部分があったため、適切な解答に至らないおそれがあると判断しました。

当該箇所設問につきましては、解答の有無・内容にかかわらず、受験者全員に得点を与えることといたします。

●問題冊子 6 ページ：（一）問八 3 行目

（誤） 三字以内で記述解答用紙の・・・

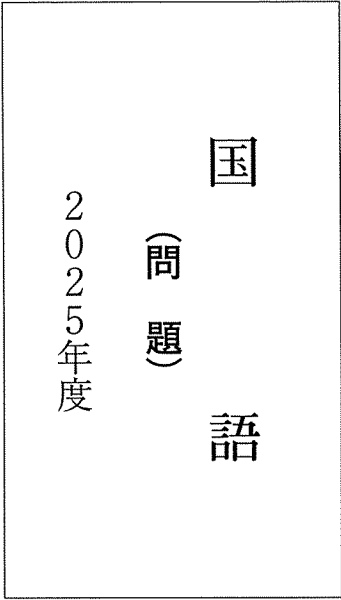
（正） 三字以内で抜き出し、記述解答用紙の・・・

●問題冊子 12 ページ：（二）問十七 2 行目

（誤） 適切なもの本文中の表現

（正） 適切なものをを本文中の表現

以上



〈R07192019〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～13ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
- （1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
- （2）所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- （3）マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	○悪い	○悪い	○悪い
マークを消す時	○良い	○悪い	○悪い	○悪い

- 5 記述解答用紙記入上の注意
- （1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- （2）所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- （3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
- 8 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 9 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 10 試験終了後、問題冊子を持ち帰ること。

(一)

次の文章を読んであとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、表現を改めた箇所がある。また、本文中のAからEは、便宜上付した段落群名である。

A

普通に生きている時、私たちは身の回りのすべてのもの、そして、この世界全体が存在しないなどとは思っていない。少なくとも私は、世界やものが存在していないかのような振る舞いをしている人を見たことはない。そんな振る舞いをする人はそもそもこの世界で生きていくことなどできないだろう。それは、世界やものの存在に疑問を投げかける観念論者や懐疑論者であっても同じである。そうした人たちは、世界やものの存在を原理的に疑いうると考えているだけであって、その振る舞いはたから見れば、彼らが世界の存在を本気で疑ってなどいないことがわかるはずである。このような意味で、「世界やものが存在しない」ということがどんなことなのか想像がつかなくらいに私たちはそれらの存在を自明のものとして受け入れてしまっている。「實在論」というのが、ものや世界の存在をこのように端的に受け入れている状態のことを指すならば、誰もそれを否定したりはしないだろう。もともと、存在についてのこうした普通の感覚は、常識と呼ぶのも奇妙なくらいに自明のことであって、そうした自明な存在を「實在」などという言葉で表現するのはいかにも大袈裟だし、またそのような自明な存在について語ることを實在「論」と呼ぶのもどこか言葉のチューニングがずれている気がする。それゆえ、私たちがものや世界の存在を端的に肯定している自然なあり方を「實在論」から明確に区別して、「存在の自明性」と呼ぶことにしよう。

ところで、このように存在を自明視している時、私たちはものや世界が、すべてではないにしても、私たちが離れて存在すると思っている。私の身の回りにあるものは、私ではなく、私とは別の存在であり、私から切り離されている。このことはそうしたものが基本的に私の思い通りになってくれないことから明らかである。これは世界についても同じであって、私はこの世界の中に生まれてきたわけだが、だからといって私は世界そのものではなく、私が死んでしまってもそれとは関係なく世界は存続すると思っている。実際、世界の方は私の a とは関係なく、その在り方を変えたり変えなかつたりするのであり、だからこそ、世界と私とは切り離された存在であり、今はたまさか私がある中に存在しているに過ぎないと通常は考えるのである。このようにものや世界が私たちから離れて存在しているあり方ここでは「存在者の離在性」と呼んでおこう。

B

實在論は存在の自明性と存在者の離在性を前提とし、それを説得するために生じた哲学的立場だと考えられる。以上の二つの直感はごく自然で、当然のものであり、本来であればそれを人々に説得する必要などないのだが、この世界のあり方を根本から問い直し、包括的に説明することをめざす哲学では、これらの直感も手放しで受け入れることはできず、批判的検討に服さなければならないとされる。だからこそ、そうした批判を斥け、首尾一貫した説明によって、存在の自明性や存在者の離在性を説得しようとする哲学的立場にそれなりの存在意義が認められることになる¹。

実際、よく考えてみると、日常生活の中にも、存在の自明性や存在者の離在性を疑わせるきっかけがある。私たちは毎晩眠りにつき、ときに夢を見るが、この事実を足掛かりにしてこれらの直感を覆すことは原理的に可能である。すなわち、今こうして目の前にあるものや世界は実は夢かもしれない、それらがいくらリアルに見えても本当はそうではないのだ、と考えてみればよい。このような考えは、一見すると馬鹿馬鹿しいものかもしれないが、原理的にはこれを誰も否定できない。自分が夢を見ていることは、その当の夢の中では証明できず、夢が覚めた時にはじめて明らかになるからだ。また、私たちはさまざまな錯覚をするし、視力が落ちてものがぼやけて見えてくることもある。こうしたことから、実際に存在するように感じられるものでも、実はそれは私たちが自分の感覚を複合させて構成したものであり、私たちに感じられるがままには存在していないかもしれない、あるいはそもそもまったく存在などしていないかもしれない、と疑うことはどこまで行っても可能である。誰も自分の感覚を超え出ることができず、何かの存在を確認しようとしたら、必ず自分の感覚を頼りにするほかないからだ。このように、すべてのものは夢や知覚像のような「主観的な表象」というかたちでのみ与えられているという見方は原理的に否定できないため、哲学的考察の一つの前提として機能する力を持っている。ここではこのような見方を「表象主義」と呼ぼう。表象主義は、私の主観的表象によつてのみ知識が与えられると考えるため、自明だと思われた存在が実は私の主観的表象に過ぎないのではないかという疑念を増幅し、存在の自明性と齟齬^{そご}をきたす。また、すべてが私の主観的表象であるならば、それは私のものであって、私から

切り離されて存在していないことになる。この意味で表象主義は存在者の離在性とも齟齬をきたす。ものや世界の存在を説得的に説明するには、こうした齟齬を解消する必要がある²。

存在の自明性、存在者の離在性、そして表象主義という三つの直感を両立させる最も素朴な哲学的テクニックが、実体と現われの二元論である。实在論は、さまざまな形態があるにしても、結局はこの二元論の枠組みを前提にした考えの一つと見ることが出来る。表象主義に従えば、主観的表象の向こう側に私たちは出られない³。しかし、存在の自明性の観点から見れば、ものや世界が存在するのは動かし難い事実だ。また、存在者の離在性の観点から見ても、ものや世界は私とは別の存在なのだから、私の一部である主観的表象ではなく、私から切り離されているはずである。だとすれば、主観的表象の向こう側にもものや世界が私たちから切り離された実体として存在し、それが感覚器官を触発することによって、私たちに主観的表象として現れると考えれば、存在の自明性と存在者の離在性を維持しながら表象主義的事態を説明できることになる。このように、現象である主観的表象の向こう側に実体、すなわち本当の存在としての實在を想定することによって、表象主義を受け入れながら存在の自明性と存在者の離在性を確保しようとするのが實在論が背景とする二元論的な説明の基本的な発想である。

C

もつとも、容易にわかるように、このようなやり方は表象主義の含意を十分に汲み取っていない妥協の産物である⁴。主観的表象の向こう側に私たちが出られない以上、そこに何らかの実体が存在しているかどうかは知りようがないからである。この点を突かれた時にできるのは、ただ、「ものや世界は本当に存在するのだ」と断定したり、「説明のためにそれが哲学的に要請される」と強弁したりすることくらいであろう。これでは存在の自明性ならびに存在者の離在性と表象主義の間にある齟齬をうまく解消できているとは言えない。實在論が「實在」という名で呼ばれる理由の一つはここにあるかもしれない。ものや世界の存在を十分に説明できているのであれば、それらが「存在する」と言えば済むのであって、わざわざ「本当に存在する」すなわち、「實在する」と言い張る必要はない。その説明が不十分であるがために、「實在」という大袈裟な言葉を使ってもものや世界の存在を訴えなければならなくなる⁵。「實在論」という名称は、實在論が存在の説明として不完全であることを暗に示しているように思われる。

二元論を背景とする實在論の問題点は、表象主義を十分に吟味せずに前提していることにある。たしかに、今私が夢を見ているかもしれないという可能性は否定できない。だが、そもそも夢が夢であるためには「夢から覚めた」とか「今は起きている」といった経験、すなわち「現実」の経験がなければならぬ。夢は現実と対比されてはじめて夢でありうる。一方、現実が現実として意識されるためには、夢を見たり、眠ったり、気絶したり、少なくともぼんやり考えごとをしたりした経験がなければならぬ。このようなコントロールがなく、ただ「覚めない夢」を見続けているのだとしたら、それはもはや現実とは区別がつかず、現実を生きているだけということになってしまうだろう。このように、「すべては夢なのかもしれない」といった **b** が理解可能（真に受けなないとしても）であるためには、夢と現実を行き来したことがあり、夢との比較で現実を知り、現実との比較で夢を知るという「夢と現実の相対的区別」を経験していなければならない。「すべては夢なのかもしれない」という **b** は、このような夢と現実の相対的区別を前提とし、それをある方向に追い詰めていってすべてを夢として想定した時に出てくる極限事例である⁶。

知覚像についても同様のことが言える。何かを見間違えるという経験から「すべては私の主観的な知覚像の合成にすぎない」という想定に至ることはできるし、その可能性は否定できない。しかし、そのような想定ができるためには、何らかの「実物」を「経験している」のでなければならぬ。「幽霊だと思ったら垂れ下がる柳の枝だった」という経験は、エドムント・フッサールの言葉を使えば、経験の暫定的なゴールにおいて柳の枝が夢でも想像でも幻でもなく「それ自身そこに」「直接に直観的に」「オリジナルとして」与えられるからこそ成立するのだし、大森荘蔵に従うならば、最終的に柳の枝が紛れもない「実物」として「立ち現れる」からこそ成立する⁷。実物と「単なる見え」が経験の中で相対的に区別されるからこそ「単なる見え」が「単なる見え」でありうるし、実物が実物でありうるのであり、そうした相対的区別の経験がある方向に追い詰めた末に出てくるのが「すべては私の主観的な知覚像の合成にすぎない」という極限事例なのである。

D

以上のような極限事例は、夢と現実、単なる見えと実物の相対的区別が成り立っていないければそもそも成立し得ない。もちろん、これらの区別が相対的なものである以上、厳密に考えれば、特定の経験が、他の経験との関わりや対比なし

で、絶対的に夢であり、絶対的に現実であるということが確定しているわけではなく、その身分は暫定的である。とはいえ、私たちは、ふだん生活している時には、このような相対的区別や暫定性で十分に満足しており、そこから極限事例へと推論を進めて絶対的な状態を想定し、それを基準にして目の前の何かが夢であるか現実であるかを確定しようとすることは基本的にない。小腹が空いてお煎餅を食べようとする時に、それが本当にお煎餅かどうか、あるいは、そもそもそれが存在するかどうかを徹底的に検証してから食べるような人はまずいないだろう。お煎餅を見ればそれがお煎餅だとわかり、手にとつて二つに折ればパリッと割れ、噛めばしっかりした歯応えとともに醤油の味と香りがし、食べてしまえばお腹がそれなりに満たされる。それがお煎餅が実物だったということであり、それを超えてお煎餅が実在するかどうかということなど考えもしないし、それを心配する人がいたら、もっと他に心配すべきことがあるだろうと思つてしまふ。存在の自明性として私たちが端的に受け入れているのは、このような相対的な確かさであつて、絶対的な確かさではない。もちろん、「相対的な確かさ」と言つても、私たちはそれを「相対的な確かさでしかない」などとは思つておらず、むしろそれを自明視しており、その意味では絶対的な信頼を置いている。ただ、その確かさは、実在論者が追い求める達成不可能な基準で見れば相対的なだけだ。だから、ほとんどの場合に私たちは、そうした相対的な確かさが得られれば、少なくとも実践的な見地からは十分に満足するし、逆に、そのような満足を与えてくれるものを存在するものとみなしているのである。

したがつて、表象主義に対抗して存在の自明性や存在者の離在性を説得するために経験を越えた絶対的な存在を想定するのはおそらくはじめから見当違いである。自分たちが表象と実物を相対的に区別しており、しかも、生きていく上で存在の相対的なないし暫定的なあり方で満足していることを思い出して確認するだけで表象主義は無害化できるからである。しかし、實在論は表象主義に対抗するために、存在の自明性において当たり前に受け入れられている存在と非存在の相対的区別を表象主義とは正反対の方向、すなわち、存在の方向に向けて極限まで突き進んでいく。そうしてようやく現れるのが存在の極限事例である絶対的な存在としての実在である。そしてその実在は私たちが存在の自明性や存在者の離在性において経験している存在ではない。というのも、それは経験もできないような何かになつてしまつていて、決して届かない彼方まで離れてしまつているからである。もし本当に「決して届かない」のだとしたら、それは「離れている」と言うことすら意味をなさないのではないだろうか。

E

以上のことからわかるのは、存在の問題に白黒つけようとするのが實在論の難点だということである。私たちは本当は白でも黒でもないグレーゾーンに生きている。しかも、そこはグレー一色ではなく、多種多様な濃淡のコントラストで成り立っている複雑に入り組んだ世界のはずだ。表象主義はあたかもそれをすべて消して真っ白な紙に戻そうとするかのようなのであるし、實在論はそれに対抗してあたかもその光景を真っ黒に塗りつぶしてしまうかのようなのである。もちろん、そうしたことは原理的にはできるものかもしれないが、そうしてしまつたら、存在の自明性において受け取られている様々なものや世界は姿を消すだろう。それらは白と黒のコントラスト⁹によつて可能になつていからである。このように、存在の自明性を適切に表現しようとするならば、白か黒かという絶対的な答えを出すことは間違ひの元である。また、存在を説明するためにも、また絶対的な答えを出そうと試みるためにも、白と黒の両方が互いに際立ってあつて経験されるという状況が根源的な出発点として成立していなければならぬ。一般に、何かを説明するにあたっては、絶対的な何かを探し当て、それによつてすべての事象を根拠づけるといふことがなされるが、少なくとも存在の問題に関しては相対的な状況を絶対的な基盤として受け入れるという逆説的な態度が求められる。このような態度を本稿では、あまりこねない用語で恐縮だが、暫定的に「根源的相対主義」と呼ぶことにする。

(寺本剛の文章による)

問一 空欄

a

に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 矜持

ロ 憧憬

ハ 思惑

ニ 贖罪

ホ 懺悔

問二 傍線部1「それなりの存在意義が認められることになる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 存在の自明性と存在者の離在性は、多くの人にとって言葉のチューニングがずれている実在論という名称を再考する哲学では、揺るぎない価値があるとみなされるということ。

ロ 存在の自明性と存在者の離在性は、多くの人が有する、世界が存在しないことを想像できないという考えを覆すものであり、実在論の前提として積極的な意味があるということ。

ハ 存在の自明性と存在者の離在性は、多くの人が同意する考え方として知られており、哲学においても世界的に認められたかなりの価値づけがなされた概念であるということ。

ニ 存在の自明性と存在者の離在性は、多くの人が受け入れているが、世界のあり方を論理的に説明する哲学では、自明とはせず改めて説得することに一定の価値があるということ。

ホ 存在の自明性と存在者の離在性は、多くの人が実在論について説明したいと考えたとき、議論の前提としてすでに確立した哲学の理論としての意義があるということ。

問三 傍線部2「こうした齟齬を解消する必要がある」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 哲学的に表象主義について説得するためには、不整合のない論証として存在の自明性と存在者の離在性を認めなければならないということ。

ロ 哲学の論考としては、表象主義の考え方が存在の自明性とも存在者の離在性とも整合するような説明を与える必要があるということ。

ハ 哲学では存在の自明性と存在者の離在性が許容されているため、批判的に検討を行い、表象主義という考え方は撤回する必要があるということ。

ニ 哲学における難題は簡単には解くことができないもので、存在の自明性と存在者の離在性を使って、解決に導く必要があるということ。

ホ 哲学的な議論を妨げる表象主義は、存在の自明性と存在者の離在性という考え方を適用して、できるだけ排除する必要があるということ。

問四 傍線部3「主観的表象の向こう側に私たちは出られない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 表象主義では、夢を見たり、眠ったり、気絶したり、ぼんやり考えごとをしたりした経験が必要とされるので、経験したことがないことについては言及できないということ。

ロ 表象主義では、人の認識が感覚器官を触発することによって、実体の主観的表象として現れると考えるので、体験の原点としての身体以外の事象については論じられないということ。

ハ 表象主義では、最も素朴な哲学的なテクニクとして実体と現れの二元論という幅広く適用できる説明が行われているため、範囲の外になる例外的な状況は生じにくいということ。

ニ 表象主義では、ものや世界が個人とは切り離されて存在すると想定するため、ものや世界があくまで実体として存在するかどうかを推測することはできないということ。

ホ 表象主義では、私たちの身の回りのすべてのものが主観的表象によって与えられた知識だと考えるため、自分の感覚を超えて、ものが存在しているかどうかを確定させる方法がないということ。

問五 傍線部 4「表象主義の含意を十分に汲み取っていない妥協の産物である」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 表象主義は、理想的には存在の自明性と存在者の離在性を取り入れたのだが、可能な限り簡潔に表現しようとするあまり、これらを十分に組み込みことができず不完全な論証になってしまっているということ。

ロ 表象主義が、主観的な体験によって説明するという制約を守ろうとするあまり、本来必要とされる存在の自明性と存在者の離在性の議論を省略してしまい、論理的整合性に乏しい説になってしまっているということ。

ハ 表象主義が、实在論との整合性を図ろうとするあまり、实在論が前提にしている存在の自明性と存在者の離在性の議論を部分的にしか取り入れることができない中途半端な理論になってしまっているということ。

ニ 表象主義は、存在の自明性と存在者の離在性を同時に成立させようと説明を加えたことで、主観的表象という中核的な概念まで排除しなければならないという不本意な選択に陥ってしまっているということ。

ホ 表象主義は、本来は主観的表象のみで説明しようとする立場であるにもかかわらず、存在の自明性と存在者の離在性を成り立たせるために、主観的表象のほかに實在も仮定した折衷案になってしまっているということ。

問六 傍線部 5「实在論」という名称は、实在論が存在の説明として不完全であることを暗に示してしまっている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 实在論の説明が十全であれば、単に「存在する」とだけ述べればよく、實在するとあえて強調しなくてはならないこと自体が、不備を示しているということ。

ロ 实在論は現実の経験と夢の経験の違いという二元論を十分に検討せずに、「説明のためにそれが哲学的に要請される」と主張しているために、完備された論ではないということ。

ハ 实在論が世界やものの存在を前提にしているにもかかわらず、存在について再び實在という概念で説明しようとしており、同語反復に陥ってしまっているということ。

ニ 实在論は二元論を背景にしているので、本来は名称には二つの要素を示す語が含まれるはずだが、そうならないことが、名称と内実の不一致を表しているということ。

ホ 實在論は「ものや世界は本当に存在するのだ」と断定してしまったがために、表象主義による説明を生かすことができず、強い論調が却って理論の弱さを露呈しているということ。

問七 空欄 **b** に入る適切な表現を、本文中の **B** の段落群から三字以内で抜き出し、記述解答用紙の解答欄に記せ。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

問八 傍線部 6「ある方向に追い詰めていってすべてを夢として想定した時に出てくる極限事例」とある。次の会話文は、傍線部 6 について話し合う二名の大学生の会話を示している。会話文中の空欄 **c** および **d** に入る適切な表現を、本文中の傍線部 6 以降の **C** の段落群・**D** の段落群から、いずれも三字以内で記述解答用紙の解答欄に記せ。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

学生 A ここで著者が言っている「ある方向」というのは、どんな方向なのだろう？

学生 B 一つ思ったのは、直前の文章で「相対的区別」と言っているから、それは絶対的なものではなく、何かしら比較することができるものだという事かな。

学生 A そうだとしたら、ある方向というのは、实在論にも共通する観点じゃないかな。それに、すべてを夢とするというのは一種の極論だから、著者は徹底的に検討する様子を「追い詰めて」という表現で強調しているのかも。

学生 B それが正しいとしたら、ここは表象主義について説明しているところだから、**c** と **d** の相対的な区別を **d** の方向に追い詰めたということになるね。

学生 A なるほど。言い換えれば、現実と夢あるいは実物と見えの相対的な区別を、夢や見えの方向に追い詰めたということかな。

問九 傍線部7「実物と「単なる見え」が経験の中で相対的に区別されるからこそ「単なる見え」が「単なる見え」でありうる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 知覚像として得られた「見え」が、あとから見間違いであったとわかって、誤りが判明して初めて取るに足らない「見え」に過ぎなかったと認識することができるということ。

ロ 実物が経験の中に現れるときには、純粋な「見え」の形をとるので、実物を経験するとき、その容態を最も単純な要素として記述する場合には単に「見え」というほかないということ。

ハ「見え」という暫定的なゴールにおいては、夢でも想像でも幻でもなく、体験されることが不可欠であり、他の要素が含まれない純粋な「見え」だけを相対的に区別できるということ。

二 相対的な区別がつかないのであれば、「見え」は実物と同一とみなされるので、両者を区別することはできず、「見え」があくまで実物の現れだと言及することさえできないということ。

ホ 相対的な区別としての「見え」は実物の現れであって実質的な要素を含まないため、何か特別なものとして言及することはできず、無限定の「見え」としかいえないということ。

問十 傍線部8「それが本当にお煎餅かどうか、あるいは、そもそもそれが存在するかどうかを徹底的に検証してから食べるような人」とあるが、著者はこうした人を端的にどう呼んでいるか。「人」という語が続くように、本文のAの段落群から二十字以上、二十五字以内で抜き出し、記述解答用紙の解答欄に記せ。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

問十一 傍線部9「白と黒のコントラスト」とあるが、ここでの「白」に置き換えられる語を f としたとき、その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ e	経験	f	想定	ロ e	感覚	f	知覚像	ハ e	表象	f	実在
ニ e	現実	f	夢	ホ e	実在論	f	二元論				

問十二 傍線部10「このような態度」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 存在の問題において、相対的であるということを絶対視し、あえてすべての事象を根拠づけるための基盤として位置づけようとする態度。

ロ 存在の問題には普遍的な側面がなく、いつも相対的な位置づけしかできないため、揺らぐことのない絶対的な要素を求めようとするという態度。

ハ 存在の問題では、絶対的な答えを出すことが間違いの元だとして、状況ごとに相対的に納得できる意見を受け入れようとする態度。

ニ 存在の問題から自分の立場は絶対的とは言えず、相対的にもっと他に心配すべき論点が現れてくると認めざるを得ないという態度。

ホ 存在の問題が重要になるかどうかは絶対的であるとは言えないので、相対的な重要性から事象を根拠づけようとする態度。

問十三 この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 直感を批判的に検討することで首尾一貫した説明を与えることは、表象主義とは関係のない実在論の争点の一つであるが、ここに表象主義の考え方を取り入れることによって、包括的に問題を解決することができる。
- ロ 実在論は、世界の存在を端的に受け入れるという存在の自明性に加えて、世界と自分が切り離された存在であるという存在者の離在性を前提にしつつ、これらがどのように成り立つのかを説明しようとする立場である。
- ハ 私たちが現実であると信じているものは、いつも夢や想像や幻である可能性があるため、哲学はこうした体験が本当に存在するのかを追究してきたが、こうした努力の甲斐あって現実を見極められるようになってきた。
- ニ 噛めばしつかりした歯応えとともに醤油の味と香りがし、食べてしまえばお腹がそれなりに満たされるといった主観的な体験は疑いようがなく、別の知覚像から得られる体験とあえて比較してその意味を考える必要はない。
- ホ 観念論や懐疑論も日常生活では存在の暫定的なあり方を認めざるをえないので、この点を受け入れれば、相容れない哲学的な立場だとみなされがちな実在論と表象主義も、根本的な対抗関係にあると捉える必要はない。
- ヘ 哲学ではいつも複数の立場からの議論が続くため、どの主張が正しいかを述べるのは容易ではないが、実在論はいまの世界について説明できる社会的意義の高い理論として、多くの人に肯定的に受け入れられている。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、表現を改めた箇所がある。

「教育格差」という言葉が広く知られるようになってきた。出身の家庭環境により子供たちの教育機会に格差が生じることを指す。「家庭環境」が包含するものは一つではないが、多くの人は親の経済状況の影響を想起するのではない。確かに経済的余裕が乏しいと子供の学校や進学などの選択肢が限られてしまう。これが貧困の世代間連鎖を生み出すというわけだ。

一見もつともらしいものの、親の所得は親自身の学歴や資格、能力など様々な要因で決まるから、そういったものが同時に子供の学力や学歴にも影響しているのかもしれない。親の所得が増加すれば子供の学力や学歴が高まるという「因果関係」があることを証明するのは容易ではない。¹

経済状況の因果効果を見る一つの方法は、予期せぬ親の所得増が子供の教育に与えた影響を見ることだ。有名な研究としては、米ノースカロライナ州でカジノの利益が6カ月ごとに近隣の貧困世帯に分配された状況を利用したものである。年間4千ドルの家計所得の増加は、子供が21歳時点の教育年数を約1年伸長させ、16歳時点で軽犯罪に関わる確率を22%も引き下げる効果を持つことを示した。

90年代に実施された子供のいる貧困世帯への政策支援の効果を調べた7つの大規模実験をまとめた論文は、年間1千ドルの家計所得の増加は就学期の子供の学力を偏差値で0.5〜0.6程度上昇させる効果を持つと結論づけている。このように貧困世帯に対する再分配は、子供の教育格差の縮小に資することを示す研究は少なくない。

加えて、教育格差が生じるメカニズムそのものに焦点を当てた研究も注目されている。住民税の支払い記録と国勢調査を照合し、貧困世帯の子供が「親よりも所得が高くなる確率」(＝貧困の世代間連鎖から脱出できる確率)を推定し、これには大きな地域差があることを明らかにした。つまり貧困の世代間連鎖が生じやすい地域とそうではない地域があるというわけだ。

この論文の著者であるラジ・チェティ米ハーバード大教授らは、これを「近隣効果」と呼び、親だけではなく地域からの影響も少なくないことを発見した。子供たちは親だけでなく、周囲の大人の背中も見えて育つということなのだろう。チェティ教授らはその後、政府の引越支援により、貧困の世代間連鎖が生じやすい地域から子供が幼少期のうちに引越しをすれば、大人になってからの学歴や経済状況が改善することも明らかにした。

だがこうした研究に懐疑的な見方をする人もいるだろう。本場に「お金」だけの問題なのか。お金はなくても教育に熱心な親の下で育てば、子供の学力や学歴が高くなるかもしれない。

実際に米国で予期せぬ急激な景気悪化により、子供を持つ父親が解雇され、所得が大きく減少した状況に注目し、所得減少が子供にどんな影響を与えたのかを明らかにした論文がある。親の所得減少は子供の大学進学にはほとんど影響を与えなかったという。奨学金などの借入れを増やすことで、子供に望む教育を受けさせたのである。この論文は、教育に対する親の考え方や価値観も重要な役割を果たすと主張している。

経済状況のみが格差を拡大するわけではない点も重要だ。お金以外に、親の「時間」をどの程度、子供に振り向けるかという時間投資もまた格差の源泉となる。

毎日の時間の使い方について記録をつけた「生活時間調査」のデータを利用して、親の時間投資の効果を明らかにしようとした研究もある。これらの論文の結論は一貫しており、特に幼少期における親の時間投資の効果はかなり大きいという。

例えば16の欧米諸国の生活時間調査を用いて、国によらず、親の時間投資に共通のパターンがあることを見いだした論文がある。多くの国で親の学歴が高い方が、子供への時間投資が長くなる傾向があるという。特に母親については専業主婦か外での就労かよりも、学歴の方が時間投資との関連が強い。英国のデータを見ると、学歴の影響が顕著なのは、本の読み聞かせや宿題の手伝いなどの「勉強」に投資する時間であり、親の学歴は美術館に行くことや屋外での運動などの「体験」に投資する時間にはあまり影響していない。

厚生労働省「21世紀出生児縦断調査」によれば、母親の学歴が高い方が、子供の勉強への時間投資が増えるのは日本も同じだ(図参照)²。しかし母親が外で就労している方が、子供の勉強時間は少なくなる傾向がある。

一方、体験については、学歴の高い母親ほど熱心な傾向がある。また、むしろフルタイムで働く母親の方が、専業主婦の母親よりも積極的だ。このように日本は英国と異なり、学歴だけでなく、働き方や労働時間も子供への時間投資に

影響している可能性がある。

体験への投資は子供の認知能力と非認知能力の両方にプラスの影響を与えることを示す研究が複数発表されている。よって子供を持つ親の長時間労働は正や働き方改革は、労働者としての親の負担だけでなく、子供と過ごす時間を増やすという観点で次世代にも良い影響があるかもしれない。

とはいえ、親の学歴による時間投資の格差は存在するし、経済的に余裕がない場合も生計維持に精いっぱい子供と過ごす時間を十分にとるのは難しい。ところが時間投資の格差を解消する目的で導入された政策の多くは、これまで目立った成果を挙げていない。

本当に必要な支援を考えるうえで参考になる研究もある。デンマークで約1500人の小学2年生の子供を持つ親に実施された支援だ。親が子供と一緒に過ごす限られた時間の質を高めるためのヒントが書かれたパンフレットを配るというシンプルなものだった。

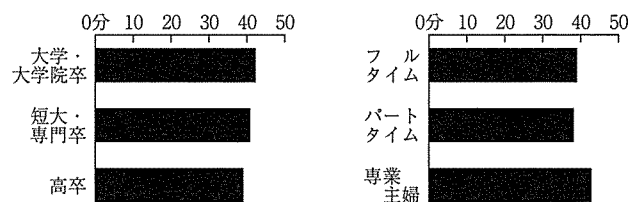
その内容は三つに要約される。第一に現時点での能力によらず、子供の読み書きの能力は鍛えて伸ばすことができる。第二に子供に本の内容を要約させたり、本の内容について質問を投げかけたりするなどの工夫により、子供が自発的に本を読む習慣を身に付けられるように仕向ける。第三に子供の読み書きの正確さやスピードを褒めるのではなく、本を読むという行為そのものを褒めてあげる。

親がパンフレットを受け取ったグループは、受け取らなかったグループと比べて、3カ月後の子供の国語テストの偏差値が2.6も高くなり、その効果は7カ月後にも持続していた。そして学歴や所得の低い親の子供ほど、パンフレットの効果が大きかったという。

つまりこの支援は、親が子供と過ごす時間の質を高めることで、子供たちの読み書き能力の全体的な底上げに成功しただけでなく、教育格差の縮小にも成功したことになる。こうした研究は、親の時間投資をより効果的なものにするために、政策的な支援として何ができるのかを考えるうえで重要なヒントになる。

(中室牧子の文章による)

a. 子供の家庭での勉強時間



b. 体験への時間投資

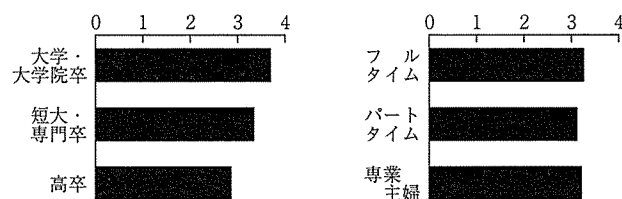


図. 母親の学歴・働き方による勉強と体験への時間投資の格差 (中室作成)

注: 勉強時間は1日当たり(塾なども含む)。体験への時間投資は、1年間に行った自然体験(キャンプなど)、社会体験(農業体験など)、文化的体験(動植物園や音楽鑑賞など)の3つの活動について集計し、指標化したものである。

※WEB掲載に際し、左記のとおり出典を追記しております。

2022年8月22日 日本経済新聞 14面

問十四 傍線部1「因果関係」があることを証明するのは容易ではない」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 経済や教育の格差が大きい地域では、親の所得が子供の学力や学歴を決める効果は小さく、両者の関係性を十分に説明することができないから。
- ロ データ解析のためには、親の所得や学歴、住民税の支払い記録などの個人情報が必要であるにもかかわらず、それらを収集していない国や地域があるから。
- ハ 大規模な実験的研究では、子供の学力を偏差値のような基準で測る必要があるが、世界中の子供を対象に試験を実施するには多額の費用がかかるから。
- ニ そもそも親の所得自体が、複雑な要因が絡み合いながら決まっているため、そのなかから、子供の学力への親の所得の効果のみを抽出することが難しいから。
- ホ 教育格差が生じるメカニズムを明らかにしようとすると、統計的な推定方法を適切に選択する必要があり、選び方次第では大きな誤差が生じるから。

問十五 本文中で用いられている以下の六つの表現は、原因と結果に分けることができる。結果のグループに属するものをすべて選び、解答欄にマークせよ。

- イ 予期せぬ親の所得増
- ロ 貧困世帯に対する再分配
- ハ 親よりも所得が高くなる確率
- ニ 周囲の大人の背中
- ホ 政府の引越し支援
- ヘ 子供の大学進学

問十六 傍線部2「図参照」の箇所では、日本のデータを使った定量的な根拠を示している。大学一年生（学生）とその指導的な立場にある大学院生（院生）とのグラフに関する次の会話を読んで、あとの問いに答えよ。

- 院生 母親の「学歴」と「働き方」の違いに着目した分析を行っています。学歴を「大学・大学院卒」「短大・専門卒」「高卒」の3つの群に、「働き方」を「フルタイム」「パートタイム」「専業主婦」の3つの群に分けています。
- 学生 上段aの左側の図を見ると、子供の家庭での勉強時間には思っていたほどの違いはないです。
- 院生 それでも学歴別では、高卒の39分強から大学・大学院卒の42分程度までと1日あたり約3分の差があります。
- 学生 母親の学歴が高くなるにつれて子供の勉強時間は少し長くなっているということですね。一方で、外で働いているか専業主婦であるかで見ると、前者の方が1日あたり4分ほど子供の勉強時間が短いです。4分といえども約40分の勉強時間に対してですから、10%違います。これが、著者が本文でそう述べている根拠なのですね。
- 院生 そういことです。では母親の就業形態別にみた体験への時間投資はどうでしょうか。
- 学生 勉強時間とは異なって、働き方の違いは体験への時間投資にあまり影響していないようにみえますね。そうすると、本文の主張と異なっていると思うのですが。

院生 紙面には限りがあるから、掲載していない他の分析結果も踏まえて述べている可能性が高いです。大学生ですから、厚生労働省のオリジナルデータを取得して自身で分析してみるといいです。

学生 なるほど。ところで、母親の学歴と体験への時間投資には明瞭な関係がありますね。

院生 グラフから読みとれることをもとにした著者の本文での主張はどのようにまとめられますか。

学生 子供の勉強時間は **A** し、体験への時間投資は **B** の関係にあると整理できます。

院生 大まかな傾向としてはそうですね。それから、グラフの注を読み飛ばしてはいけません。本文を理解する上で必要な情報が書かれていることが多いです。もし、本文にこの内容を書いたら、流れが悪く、読みにくくなってしまいますからです。この文章の注でも子供の家庭での勉強時間や体験の定義が書かれています。

問十六― 右の会話中の二重傍線部「本文の主張と異なっている」とあるが、この学生は本文のどの箇所を指してそう述べているのか。当該箇所の最初の一文の冒頭の五字を記述解答用紙の解答欄に記せ。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

問十六― 二 空欄 A と B に入る表現の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ A 学歴の高さに比例、外での就労の有無と関係 B 学歴の高さ・就業形態と無関係
- ロ A 学歴の高さに比例、外での就労の有無と関係 B 学歴の高さと相関
- ハ A 学歴の高さに比例、外での就労の有無と関係 B 就業形態と強い相関
- ニ A 学歴の高さおよび外での労働時間の長さの比例 B 学歴の高さ・就業形態と無相関
- ホ A 学歴の高さおよび外での労働時間の長さの比例 B 学歴の高さと相関
- ヘ A 学歴の高さおよび外での労働時間の長さの比例 B 就業形態と強い相関

問十七 以下は、この本文にタイトルを付けるといふ課題に取り組む大学一年生（学生）とその指導的な立場にある大学院生（院生）との会話である。会話中の空欄 C に入る語句として適切なものの本文中の表現を利用して十字以内で、記述解答用紙の解答欄に記せ。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

学生 「経済的なゆとりと教育機会の関係」というのはどうでしょう？

院生 本文の前半の内容だけならばよいですが、後半や最終的な著者の主張が含まれていませんね。

学生 後半ではお金以外も重要であるという論が展開されています。なかでも、親の時間投資の重要性を訴えています。「経済的なゆとり・親の時間投資と教育機会の関係」というのはどうでしょうか。

院生 網羅的なタイトルとしてはよいでしょう。でも、著者の主旨に焦点が合っていないですね。著者は経済的なゆとりが教育の内容を決定づけると言っていますか？

学生 著者は「お金はなくても教育に熱心な親の下で育てば、子供の学力や学歴が高くなるかもしれない」と述べていますね。それなら、後半を中心にして、親の時間投資と教育機会の関係とする方がよいですね。

院生 著者がデンマークの例をとりあげて、何を強調しようとしているのでしょうか？ 単に関係性を論じているのではないですし、時間投資の格差解消は難しいとも述べています。その点を踏まえるとなおよいです。

学生 デンマークの件は単なる事例紹介ではなかったんですね。親が子供に対する C と教育が向上する、という点がこの文章のタイトルに含まれるべきですね。

問十八 この文章で扱っているテーマに関連する古典のエピソードとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 伯兪過ち有り。其の母これを笞うつに泣く。其の母曰く「他日子を笞うつに、未だ嘗て泣くを見ず。今泣くは何ぞや」と。対えて曰く「他日兪罪を得て笞うたるにつねに痛し。今母の力衰え、痛からしむる能わず。是を以つて泣くなり」と。

ロ 夫れ嚴家に悍虜無くして、慈母に敗子有り。吾、此を以つて、威勢の暴を禁すべくして、徳厚の乱を止むるに足らざることを知るなり。夫れ聖人の国を治むる、人の吾がために善なるを待まざるなり。

ハ その舎、墓に近し。孟子の少きとき、嬉遊するに墓間の事を為し、踴躍築埋す。孟母曰く「これ吾の子を居処せしむる所以に非ず」と。及ち去りて市の傍らに舎す。その嬉戯するに賈人衒売の事を為す。孟母又曰く「これ吾の子を居処せしむる所以に非ざるなり」と。復た徙りて学宮の傍らに舎す。

ニ 嘗て三たび戦ひて三たび走る。鮑叔以つて怯と為さず。仲に老母有るを知ればなり。仲曰く「我を生む者は父母、我を知る者は鮑子なり」と。

ホ 楚国先賢伝に曰く、宗の母筍を嗜む。冬節將に至らんとす。時に筍尚ほ未だ生ぜず。宗竹林に入りて哀歎す。而して筍之が為に出づ。以つて母に供するを得たり。皆以つて至孝の感を致す所と為す。

問十九 この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 子供の教育に対する親の所得の増減の効果を確かめるためには、軽犯罪に関わる確率、子供の学力の偏差値、子供の教育年数などを調査することがある。

ロ 生計維持に時間を費やし、子供と過ごす時間が減る経済的なゆとりがない家庭に向けた、時間投資の格差を解消する政策は効果が高く、継続すべきである。

ハ 子供の教育は、教育に対する親の考え方や価値観の影響が大きいものの、教育に対する時間投資という観点から、最終的には経済的な格差で説明できる。

ニ 高学歴な親ほど子供に費やす家計の負担は増加傾向にあることを反映し、親が子供に費やす時間が長くなれば長くなるほど、子供に高学歴を求めるようになる。

ホ 英国では親の学歴の高さと文化的体験や屋外での自然体験などとの間には強い関係がない一方で、学歴の高さに応じて勉強を教えることにつながる時間は長くなる。

ヘ 急激な景気悪化による親の所得減少は子供の大学進学に大きな影響を与えなかったという調査結果から、教育格差の縮小のための公的支援は意味がない。

〈R07192019〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					



--

17
(大学使用欄)

--

16
1
(大学使用欄)

--

10
(大学使用欄)

--

8
(大学使用欄)

--

7
(大学使用欄)

〈R07192019〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

問十七

5

10

問十六

5

問十

25

人

20

c

3

b

3

d

3

国語

記述解答用紙